

時の過ぎゆくままに (4)

おじいさんになって死ぬる幸せ



桐野 三郎

※ 災いを転じて福となす

古い話だが社会奉仕団体Rクラブの国際大会が指宿市で開催された。国内はもとより海外からの来賓も多数招いての大会だけに、地元クラブの受け入れ準備は万全を期して周到に進められた。大会は好評のうちに幕を明け大成功を予感させてまずは午前中を終わった。が、思わぬ大失態に気づいたのがすぐその後の昼食時間だった。

何せ多人数の大会、昼食会場は近辺の体育館や学校の校堂など数か所に分散して準備、食事中は遠来の客をもてなすために地元各種

団体の歌や踊りを披露しようという趣向。そしてそれも一見好評裡に終わったように見えた。だが、地雷が埋めこまれていたのはその郷土芸能を解説するために配られたチラシだった。

「この踊りは朝鮮征伐のときの勇壮な踊り」いや、正確には記憶していないがそんな意味の一行がチラシの中にあつたのだ。来賓の中にはもちろん韓国からのメンバーも多い。招いておいてそんな踊りを披露するとはとんでもない非礼だろう。気付いた事務局は慌てた。

だが、午後の開会冒頭で陳謝の挨拶に立った大会責任者の言葉は率直で誠意の溢れたものだった。これも詳細はもう覚えていないが、僕が紳士として尊敬する先輩の言葉だっただけに「さすが！」と感服したことをはっきり覚えていいる。でも実は、それ以上に会場の空

気を爽やかなものに変えたのが答札に立った韓国側代表の、これまた率直な言葉だった。

「いや、私たち韓国人だつて日本人の悪口をずい分言つてきましたよ。日本人が我々のことを『朝鮮^ピ』と呼んだようにね。そんな怨みや憎しみはまだ少しは残っているのかもしれない。だが私たちの子供や孫の時代にはそんな憎しみを残してはいけない。そのためにお互いに努力するのが私たちの役目でしょう」

たしかそんな内容だった。考えようによっては取り返しのつかない大失態ともいえるトラブが、双方の紳士的な応酬によってみごとに氷解した一幕である。いや、氷解したばかりではない。このやりとりを機に会議場の空気が一変。打ち解けた和やかなものになったのだ。率直な応酬が絆を深めたといつてもいいだろう。その後二、三日続いた会議でも

固苦しさが一挙に取り払われて大会はめでたく幕を閉じたのだった。災いを転じて福となした好例だろう。

ところで、という三十年も昔のことを何故いまごろになつて鮮明に思い出したか―だが、孫の時代はともかくもうすでに子供の時代は到来しているのに、日韓関係はもちろん、日中関係もあの紳士的な双方の願望とはまるで反対の方に推移している皮肉な現状に呆れるからだ。こと政治ともなれば紳士的にといいわけにはいかないのだろうか？ ぼくは政治家の資質のほうにも問題大有りだと思ふのだが。

※ 戦争の恐怖初体験

戦中派（といわれる世代）である。ちよつと遅れて生まれてきたお蔭で戦場に狩り出されることは免れたが、戦争を間近に見、聞き、

感じてきた世代（生まれた年の満州事変に始まり支那事変、二次大戦と中2まで）ともいえる。戦争の愚かさについてはすでに有り余るほどの記録が残され、数えきれないほどの検証や証言がなされてきたことは衆知の事実。でもやはりあの激動の渦中で死すら覚悟せざるを得ない体験を経てきた一人として「これだけは書き遺しておきたいと思っっていることの一つや二つは僕にもあるのだ。書き遺すというには僕はまだ若過ぎるかもしれないが〈炬ばたセイ談〉が記念すべき10号と聞いて紙面をお借りする気になった次第。しばしおつき合い頂ければ有り難い。

絵が好きな子供だった。小学校に上がる前から描いていたが描くのは飛行機や軍艦ばかり。支那大陸で日本軍は連戦連勝を続けていた時代だから、僕はすでに軍国少年ならぬ軍国坊やだった。それでも生々しい戦争体験を

聞いたのは小学3年生からだ。陸軍の戦車隊長で少佐だった富重のおじさんが退役（負傷のためだったか？）して、道路向かいの屋敷に帰還してきたのだ。その屋敷でもだが、夏の夜など道ばたに並べた涼み台に、近所の人たちが毎晩のように集っては富重少佐の武勇談を聞くのを楽しみにしていた。支那軍を蹴散らして進撃する戦車隊の活躍ぶりは何度聞いても胸躍るのだが、僕にとっては唯一つ、今思い出してもぞつとする恐ろしい話があった。日本刀でチャンコロの首を切らせた話だ。「チャンコロ」とは朝鮮人に対する「朝鮮ヒ」と同様に、当時の支那人に対する蔑称である。戦場で捕虜にした支那人の何人かを、戦闘に不馴れな新兵たちに度胸をつけさせるために殺させたというのだ。まず彼らにスコップで溝を掘らせ、そのあと後手に縛り上げた上に目隠しをして坐らせる。そして後から

首を斬り落とさせ、死体は溝に投げ込んで埋めさせたという話。もちろん日本刀の所持を許されたのは将校以上だけ、ということはつまり富重さんちの床の間に飾られていた日本刀は何人もの支那人の首を斬り落とした刀だったというわけだ。

世はすでに国民皆兵、望むと望まないに拘らず健康な男児なら誰しもいずれは兵役に召集される。小3の僕にもその辺の覚悟はどうにかできている。戦場に行けば撃つ、撃たれる、斬り斬られるで結果、戦死ということも当然想像する。だがそれは無我夢中の戦闘の最中、恐怖を感じるとまもないだろう。でも軍隊に入るとは、身動きできない無抵抗のチャンコロの首を日本刀で斬り落とす、そんな命令にまで従わなければならぬのか？ 「俺にはとてもそんなことは出来そうもない」と、僕はひそかに恐怖におののいた。

わが家にも三振りの日本刀があった。夜遅く床の間に正座しながら父が手入れしている姿を見受けるものだった。僕も何度か持たせてもらったことがある。ずしりとくる重みもだが、鋭い刀身や鋭利な剣先など眺めていると、子供心にもどこか引き込まれるような妖気とでもいうような何かを感じるものだった。しかし、富重のおじさんの首切りの話を聞いてから、僕は日本刀を見るのも嫌になった。



※ 死ななければならぬ不条理との対峙

小3からは学校帰りに共学舎（鹿児島市にあった郷中教育舎の一つ）に通い相撲、水泳、詩吟等に親しみ、義心伝や妙田寺参りや曾我どんの傘焼きで勇壮な気概を養い、さらに小4からは海洋少年団員に選ばれて水泳やカッ

ターの漕艇訓練ばかりか、手旗信号やモールス信号までマスターして、軍国坊やの僕は順調に軍国少年に成長。小4の十二月に勃発した太平洋戦争で日本が連戦連勝を続けた時期には、聞きしに優る日本軍の強さに驚喜したものだ。

入った中学校は軍神横山少佐を生んで映画の舞台にもなった名門高(自称の?)。海兵(海軍兵学校)や陸士(陸軍士官学校)などへの合格率も高く、勉学もだが軍事教練なども徹底していた。配属将校以下旧軍人が数名、殊に僕らの教練を担当した陸軍准尉(元)のしごきの凄さは後々まで語り草になったほどだ。

だが、中学に入った昭和十九年にはすでに戦況は彼我逆転、日本不利になっていたのだろう。「この戦争はどうやら負け戦だ」と言い出した町内会長をしていた自分の父親と、むきになって喧嘩をした記憶がある。「何をバカ

な!そんなことを言いだす人間を非国民と言うんだよ!」などと。しかしその年も後半に入る頃には「親父が言うのがどうやら本当かもしれない」と、内心ひそかに考えるようになっていた。サイパンやアッツ島での玉砕の報が次々と耳に入るようになったからだ。

日本の敗戦をはっきり予感しはじめたのは中2(昭和二十年)の春からだ。鹿児島市が四月の騎射場方面を皮切りに、平之町、上町方面を次々に空爆に晒され、極めつけが六月十七日の大空襲。一夜にして鹿児島市は見事なまでの焼野原と化した。鴨池の飛行場から迎撃のために飛び立つゼロ戦の機影などすでになく、制空権は完全に米軍の手に落ちた。鹿児島島の青い夏空を、グラマンやロッキードP-38がわが物顔で飛び交っていた。

だが、書き遺したいのはそんな戦争の経過ではない。その経過につれて追いつめられて

いった、中2だった僕の心境の推移だ。

中学校に入ったところから自分の進路は決めていた。中学四年を経て海兵に進学と。格別愛国心に燃えていたわけではない。軍人を志す志さないに拘らずいずれは兵役に狩り出される国民皆兵の時代。ならば最初から軍人学校を経て早く将校に昇進したほうが有利。それもだが、何よりも海兵の腰に短剣を吊した正服姿がカッコ良かった。そこら辺が海兵と決めこんだ子供っぽい理由だったような気がする。

だけど戦況が緊迫してくる十九年後半ともなれば「そのうち海兵だつて繰り上げ卒業になつて前線に狩り出されるかもしれない。そして特攻隊に組み入れられたとしたら・・・」などと、自分の死がかなり差し迫ってきたような気になつてくる。入学した頃は、海兵を卒業して少尉に任官、前線に出撃して運悪く

《戦死》という人生で終わつたとしてもそれは三十歳前後、漠然とだがそれぐらいの人生を思い描いていたのだ。それが敗色濃厚となつた二十年春には「いや、下手をすると俺の人生も二十歳そこそこで特攻機で敵艦に突入して一巻の終わりーということになるのでは？」そんな焦りと不安に襲われる夜が続くようになっていく。昼間は消火訓練だの焼け跡整理の動員に追われて考える暇などないが、夜布団に入つてから（自宅は唐湊の山裾にあつて焼け残つた）徐々に切迫してくる自分の「死」を考えはじめなのだ。

現在流の満で数えればまだ十四歳にもなつていないが思春期は始まつていた。隣家の一コ年上の女学生に淡い恋心は抱いていても、まだ恋を語る術も知らなければ余裕もない。「俺は遂に異性も知らずに死んで行かなければならぬのか・・・」と、やり場のない煩

悶に襲われるのだった。

しかしそれも、鹿児島市が焼野原になり、次いで沖縄全滅の報が流れるころにはほとんど絶望に近づいていく。沖縄の次はいよいよ本土決戦、米軍の上陸地点はどうやら志布志方面らしい。空からの特攻作戦などできるはずがない。そんな飛行機など日本には残っていないのだ。志布志方面から押し寄せてくるであろう敵の戦車の下に、爆弾を抱えてもぐり込んで自爆。中学二年生の僕らに残された死に様はそれぐらいしか考えられない。しかもその時期の到来は遅くとも一、二ヶ月後。いや、早ければ来週にもだ。という自分の最期は何度考え直してみても、九十九パーセント動かしようのない当然の帰結として夜な夜な襲いかかってくるのだ。わずか十四歳そこそこで自ら死地に飛び込んで行かなければならない、そんな自分の運命を考えてはひそか

に涙した日々が僕にもあったのである。

※ 突如として訪れた青天の霹靂^{へきれき}

連日のように敵機の飛来する鹿児島市から逃げるようにして、兄と共に牧園町の三体堂に疎開したのは七月に入ってからだった。先に疎開していた両親や妹たちと合流して祖母宅での賑やかな暮しが再開。緊迫した戦局に変わりはないものの鹿児島市とは様変わり、農家の主婦たちが戦争のさ中だということの田の草取りに精出している風景などどこか長閑で、荒んだ僕の気持ちをしばし和ませてくれた。ひと月そこそこの期間だったが田舎の婦人たちは優しく美しく（そう見えたのは僕が思春期だったせい？）きれいな川では水泳を楽しむことも出来たのだ。という束の間の、命の洗濯のような疎開だった。

ラジオで重大ニュースが発表されるとい

八月十五日に、部落の人たち十数人といつしよに集つたのはすぐ隣の親戚宅。正午に発表された天皇の紹勅は雑音ばかりで何のことやらさっぱり聞き取れないが、前後の事情がある程度分かっていた役場勤めのおじさんの解説で、どうやら日本が戦争に負けたらしいことが徐々に解つてくる。とはいえ一億総玉碎という覚悟を押しつけられていた当時の日本人にとつて〈降伏〉とはとても信じ難い現実。

次々に疑問や質問が飛び交い騒然となった。「米軍はいつ現れるんだ」「我々はどんな目に遭わされるんだろう?」「若い女性は皆連れ去られるのではないだろうか」などと。

もちろん僕にとつても日本の敗北、いや、降伏は青天の霹靂。不条理な自分の運命を呪い続けた日々があればどあつたというのに、まさか日本が降伏することがあるうなどと
は・・・。

「だが、若しかしたら俺はこれで死なずに済むのではないか? いや、勝ち誇つた米軍に酷い仕打ちを受けるかもしれないがそんなことなどどうでもいい。十四歳で死なずにすむなら何だつて我慢できるさ」

事情が呑み込めるにつれて僕は徐々に、腹の底から嬉しさがこみ上げてくるのだが、心配ごとを口々に議論し合っている大人たちの前で笑い出すわけにはいかない。ひとりその場を抜けて田圃の中の一本道を川に向かった。集落の人々は皆ラジオに釘づけになっていたのだろう。異様なまでに静かな緑一色の村の中を、僕は夢を見ているような気持で歩いていた。橋の手前を川沿いに少し上ったところに僕らの遊び場があつた。水泳をするというには恥ずかしくなるぐらいの広さだが小さな滝壺になっている一画。いつもは飛び込み台代りの岩に腰をおろし、僕はつい先刻起こつ

たばかりの奇跡をゆつくりと反芻していた。沸々と湧き上がってくる喜びを噛みしめながらだ。清冽な流れの上を無数のとんぼが飛んでいた。



※ 鬼畜と恐れられた米兵たちの実像

米占領軍（約一千名）が鹿児島市に進駐してきたのは敗戦後二ヶ月を経た十月中旬だが、彼らが宿営地を選んだのがなんとぼくらの中学校。焼野原となった市中にもはや彼らを受け入れるほどの建築物がほかに残っていないかったというのが率直な理由だろう。だがその校舎（鉄筋三階建）だって生徒たちが泊り込みで防空当番に当り、米軍の焼夷弾から必死に守り抜いた建物、六月の大空襲の夜など幾人もの焼死体まで運びこまれたことなど考えると、やはり敗戦という歴史の皮肉を実感し

ないわけにはいかなかった。

連日米兵たちは入居準備で汗水たらして働 き、僕たち学生は伊敷の陸軍兵営跡に移転するため、午前、午後の二回机や椅子などの荷物運びで往復するのだが、その作業が終わるまでの二週間が、僕らの学校で米兵たちといわば同居—という形で過した期間だ。当然接触もあれば交流もおこる。そしてその全てが新鮮な驚きの連続。現代流いまに言えばカルチャーショック。しかもそのショックはあの敗戦の日、田舎のラジオの前でみんなが並べ立てた不安とはおよそ真逆の、明るい笑いに満ちていたという意味ではこれまた青天の霹靂といってもよかった。

和式トイレの上に〈屈む〉という姿勢が取れない米兵たちが、真っ先にした仕事が校庭のまん中を掘り起こしてバラックのトイレを造る作業だったこと。それを見て学生たちが

笑いころげた話などはたしか本誌（8号）に書いた記憶があるから省略するが、いま思い返してみても、たった二ヶ月前までは迫りくる玉砕という運命に脅^{おそ}え続けていた学生たちが、晴れわたった秋空の下で敵兵たちを見て笑いころげた記憶は鮮明だ。あれは長い長い軍国主義というトンネルからやっと抜け出したという開放感、さらには「鬼畜米英」と聞かされ続けた米兵たちの実像に接してみれば、なんと明るく陽気な若きヤンキーたち。敗戦国の僕らを使役にこき使うどころか自分たちの便所造りに汗水流しているのだ。そんな思いも寄らぬ安堵感の発露でもあったのだろう。

移転作業が終わって僕らが母校を後にするころには、校門の周辺にはもうガムやチョコレートをねだる子供たちが群がり、半分顔を隠すようにスカーフで頭を覆ったご婦人たちが

もちらほらと出没するようになっていた。だが、彼女たちが後にPANPANと呼ばれるようになる娼婦たちだとは、僕はまだ気づいていなかった。

※ 混乱の中での戦後の始まり

伊敷兵営跡での一年間は混沌の中での一年だった。陸軍では最強を誇ったという四十五連隊（のち十八部隊）兵舎も敗戦三ヶ月後の十一月ともなれば荒れ放題の藻抜きの殻。その兵舎跡に中学校二校に専門学校（工専）一校、計三校ひしめき合っただけの授業だ。窓のない廊下越しに反対側の教室の授業も丸見えなら、声まで聞こえてくるというお粗末さ。その上、これまでの教育は軍国主義だったという理由で殆どがアウト。即刻民主主義教育にあらためろーで教育現場はテンヤワンヤの時代。どんな教材を使って何を学んだかなんて

記憶にほとんど残っていない。覚えてるのは蚤や虱がまだ教室に残っていたこと、生徒たちはほとんどが空腹のために早飯はあめし（午前中の休憩時間に食べる）をしていたこと、勉強のほかに作業（荒れた兵営跡地の整理など）の時間が多かったことぐらいのものだが、その兵営跡の片隅に、もう教えることのなくなった元陸軍准尉殿が悄然と立ち竦む姿を幾度も見かけたことだけは、いまでも眼底に焼き付いている。

だがそんなうらぶれた学校の授業なんかどうでもいい。時代は変わったのだ。がんばりがらめに縛られていた軍国主義から一挙に解放され、民主主義、自由主義、個人主義などと次々に注ぎこまれる新しい概念にわけも分らず舞い上った僕たちは、ひたすら遊び回ることとに忙しかった。鹿児島市の光景も一変した。戦争に負けたというのに市民のエネルギー

ーというか底力というか、焼け跡には次々に掘立小屋が出現し、易居町や名山堀、西駅（いまの中央駅）周辺には次々と闇市が出現して賑わいを見せていく。そればかりか街中には米兵たちのジープが走り回り、主要な交差点にMPやSPの腕章をつけ頭にはヘルメット、腰に拳銃と警棒を吊した憲兵が立ち、非番の米兵たちが昼間から娼婦たちと腕を組んで街を往くという、いわゆる戦後風景がまたたく間に出現していった。

唐湊の自宅から伊敷の兵営跡までは一時間以上もかかる通学路、朝は合流した仲間たちと登校を急ぐが帰りは三々五々、気の合った者同士で遊び歩くのが楽しかった。今なお忘れられない記憶を二つ。

横川出身で下荒田に下宿していた親友に実家から白米一升が送ってきたとき、その一升を甲突川べりの草むらの中で飯いごうで炊いて

仲間四人で食べた。おかずはたしかたくあんの数きれずだった。だが、生涯の中で一番旨かった食べ物は一と問われれば、やはりあの時の銀シャリの味と答えるだろう。「ハングリーズ・ザ・ベストソース」という格言もだが、食べ物も酒といっしょでやはり誰と、どういう状況で食べるかが重要な要因だろう。その頃僕にとつても生涯の友情が芽生えた年頃でもあったのだ。

いま一つは鮮明なカルチャーショック。びしっと糊のりの利いた制服を着た米兵たちが、派手なスカーフや服を身にまとった娼婦たちと昼間から堂々と腕を組んで、誰はばかるとなくあちこちを散策している光景は（今ままでと何もかも違う）という時代の転換を、僕たちの目にくつきりとインプットしてくれたという意味で忘れ難い。

さらに言えば、俗にはパンパンと呼び捨て

にされていた娼婦たちだが、僕にとっては女という性の深淵を覗いた最初の経験だったよ
うな、どこか懐かしい思いで振り返ることがある。進駐してくる米兵たちから如何なる仕打ちを受けるか、日本中の男たちがびくびくしていたあの時期に、米軍が出現するや否や、わずか数日にして姿を見せた女たち。そんな女の性を語るまかるとき、男たちはややもすれば「男は頭でものを考えるが女は子宮でものを考えるのさ」とか、「人類が最初に始めた商売は売春だったというからな」などと薄っぺらなジュークでごまかすことが多いが、あの当時の光景を知るばくは、いまだに「娼婦はより神に近い」という言葉に説得力を感じている。

※ 軍国主義との訣別

スタートした戦後の一年を過ぎた伊敷兵営跡から母校に帰ったのは、翌二十一年の十月

末だった。米兵たちが引き揚げた後の校庭からは奉安殿（天皇の写真と教育勅語を内蔵）や忠魂碑（台石に卒業戦没者の名前が刻まれていた）が消えて、校庭の一隅には将校たちが住居として使っていたカマボコ兵舎（後に教職員住宅として使用）が数棟残っていた。もちろん思い出の彼らのトイレは跡形もなく整理されて―だ。

授業が始まったのは十一月からだ、その翌年三月までのいわゆる中学三年後半時代の記憶は、学校の成績が人生最悪（同級三百名の中のビリに近かった）だったことぐらいしか覚えていない。むしろ教育現場でも混乱が続く。この一年間に校長が三回も交代（一人は軍国主義教育の責任をとり辞任、代わった校長は同責任で公職追放など）した一事を取ってもそれは判るが、僕らが当面した笑うに笑えない事例をひとつ。

米軍軍政官が学校に講演に来ることが決まった。全校生徒を講堂に集めて迎えるというわけだ。教員たちはさて、どういう形でこの軍政官を迎えるかについて鳩首協議した。宮崎県で「起立、礼！」という号令で迎えたためにひどく怒られたという情報が伝わっていたからだ。軍政官の気嫌を損ねないためにはどうすべきかに迷った挙句の結論は「起立、礼！」という軍隊式の号令が良くないのだろう。ならば号令をやめて、軍政官登壇と同時に最前列の生徒に黙って起立礼をさせる。後の者は全員黙ってそれに倣うことにしようということに衆議一決した。

その軍政官の話は記憶にないが、講演の後、教職員がひどく軍政官に怒られた話は間もなく洩れてきた。「初めてやって来る相手（自分）が何者かも判ってないのに、なぜ生徒に起立や礼などさせるのか！」というのだ。つ

まり権威に盲従する悪しき習慣は即刻やめなさいと。いやはや、当時は先生たちの頭の切り替えも、一朝一夕にはできなかったということだ。ついでに思い出したことだが、たしか三、四人はいた英語の先生たちの英語も、外国滞留経験のある一人を除いてアメリカ人には全く通じなかったと聞くものだった。



※ おじいさんになって死ぬる幸せ

さて、以上で僕の書きたかった時代の背景は一応終わるのだが、その翌年、つまり人生のターニングポイントを過ぎていよいよ本格的戦後教育にはいった(二十二年四月) 中学四年(新制高校に変わる前)の冒頭の授業で、生涯忘れられない名講義と出会えたお陰で自分の意識が整理された。そんな思いがあるの

で書き足しておきたい。

「世界史」を初めて習う冒頭の時間だった。面高先生(後に鹿大教授で転出)が質問した。

「エデンの園でアダムとイヴは幸せだったろうか、不幸だっただろうか？」と。まっ先に手を挙げたのが僕の親友で早熟の読書家。

「自信満々に「何の苦勞もない樂園に二人だけ、幸せそのものでした」というのだ。だが先生は「ほかに誰か？」と次々に指名するのだった。その間、僕など「はて、アダムとイヴって何者だ？ たしか八つ手の葉っぱで前を隠した土人みたいな男女の絵を見たことがあるがあれのこと？」と頭をひねっているレベル。もちろん先生の問いに対する答は「幸せだった」だけである。七、八名の同じ答を聞いてからおもむろに先生が言った。「はたしてそうだろうか？ この世にはまだアダムとイヴという二人の人間しか存在しないのだ。ほか

に比べるべき幸せも不幸も存在しなかった。ということは、アダムとイヴは幸せでも不幸でもなかったのではないだろうか？」

「つまり世界史を学ぶにあたって、この世の価値観とは常に相対的なものであって絶対的なものなんて有りはしない。何と比べるかの問題だ」ということを、冒頭できちんと教えておきたかったのだろう。

いま、自分の人生を振り返って大別すれば、はつきりと二色に分かれる。終戦までの真っ黒な人生と、その後の真っ白な人生である。もちろん真っ白な時代にだって人並みの失敗や苦勞もあれば大病にも遭遇してきた。だがそれすらも殆んど真っ白に思えるのは、いつもそれ以前の真っ黒と比較して考える習慣が身に染みついていいるからだ。

山下清という放浪の画家がいた。彼が放浪を続けたのは徴兵忌避だったという説がある

のだそうだ。捕って検査を受けた時も彼独特の吃音で知的障害者を演じて逃れたのだと。

「兵隊さんは死ぬと靖国神社で神様になるっていうけどホントかな。ぼくはウソだと思うな。ぼくは神さまなんかになりたくないな。おじいさんになって死にたいな。」

これも山下清の言葉だそうだが、「普通のおじいさんになって死ぬる幸せ」を身に沁みて理解できるのは、やはり僕たちにはあの十四歳の春があったからだろう。僕などいまはもうおじいさんどころか、下手をすれば間もなくひいおじいさん（曾祖父）にすらなり兼ねないのだ。

ついでにここでもお節介な意見を一つ。近ごろ耳にする、若い世代が感じているらしい不幸感だが、その殆んどが単に「そこにある幸せに気づかないだけの不幸」ではないのか。

だとすれば、この恵まれた時代を生きているというのに勿体ない話である。

※ 複眼で振り返りたい戦争の時代

僕が書き遺したいことの第一は言うまでもなく戦争をすることの愚かさだが、一口に戦争といっても大別すれば、戦わざるを得ない(防衛のための)戦争と、してはいけない(侵略のための)戦争があると言っているだろうか。残念ながら昭和六年の満州事変から始まって太平洋戦争まで突入していった我が国の戦争はしてはいけない戦争だった—という意味で罪は深い。後になって振り返れば政界や軍閥の中にもかなりの戦争反対論者がいたというのに—だ。更にはその戦争を三百万人もの犠牲者を出しながら遂に原子爆弾を落とされるまで終わらせることもできずに、一億総玉碎

などとわめいていた愚かさを思うと、いまなお痛恨の思いがこみ上げてくる。

僕の母校には「君故山に瞑^{ねむ}れ」という題の部厚い戦没者追悼録が残っている。集録されているのは四百名以上、涙なしには読めない頁が多いが、真珠湾攻撃で散った横山少佐の頁なども、ちよつと末尾の記録を読むだけでも無残だ。秀才の誉高^{ほまれ}かった少佐の死で悲しみにくれていた母上も、三人の娘さんと共に二十年六月十七日の空襲で一家全滅、さらに少佐の兄上二人も中国戦線で戦死されているのである。

だが一方、僕らの学校は軍人学校として知られただけではない。芸術系の逸材も輩出しているのだ。反戦主義を貫いて太平洋戦争前夜に日本を脱出、米国に渡つてのちに絵本作家として名を成した八島太郎もそうである。

戦争中は米軍情報将校として敵側に回り、戦

場にばら撒く反戦ビラを作成したことは有名である。「バカな戦争はやめよう！」と、必死に呼びかける反戦ビラを戦場で見た美術学校時代の友人たちは「あ、これは岩松（八島の本名）の絵だ！」と一目で判ったというから運命は皮肉である。まぎれもなく〈愛国心〉というスタート地点は同じだったはずの同窓生同士が、戦場という殺しい合いの場で敵と味方に分かれることになったのだから……。

引合いに出すわけではないが例えば知覧の特攻記念館も、出撃前のあの遺書に涙することは僕も同じだが、あれを書くまでに特攻兵たちが辿ったであろう何ヶ月、あるいは何年間かの煩悶や苦悩、場合によっては自分の運命の不条理を呪ったことすらあるのではないだろうか——などと裏の裏まで考えてしまうのが僕らの世代かもしれない。後になって知ったことだが、特攻作戦という無謀な作戦で

自分の部下を死なせるわけにはいかないと、最後まで強硬に拒否し続けた隊長がいたことを知ったときはむしろほっとしたものだった。尊い一命を賭けるに足る作戦ではないというのだ。こんな見識が日本の軍閥の中にも存在したことはひとつの救いといつていいだろう。あの戦争はさまざまの角度から振り返って見る必要があるのではないか。

いま一つ、戦後米軍の日本占領政策もそうだろう。公職追放、レッドパージ、東京裁判、憲法制定、その他の事件やトラブルなど数えあげたらきりがないほどの問題が語られてきた。だが、これはほとんどが敗けた日本側から見た問題点、逆にもし日本が勝って米国に立駐していったらどうなっていたか——なんて立場で論じられることはない。それを思い浮かべるのがこれまた僕らの世代かも知れない。

若し日本が戦争に勝って米国に進駐していたらとてもあんなものでは済まなかったはず、つまり米軍が日本で起した問題などより遙かに大きな汚点を戦後史に残したのではないか。正直に言つて僕は今でもそう思っている。たしかに米占領軍が日本で起した問題が数々あつたことは事実には違いない。が、彼らがそんな問題を最小限に留めようと、懸命に努力したこともまた事実だつたことを僕はは見てきたのだ。トイレ造りを自分たちでやつたから—なんてことばかりではない。街のあちこちに立っていたMPやSPは日本人に睨み（にら）みを利かせるというより、自国の兵隊たちを統制するために見張つていた。残念ながら長年日本の軍隊を間近に見てきた僕らには、どう考えてもあれ以上に人道的に日本軍が振る舞えたとは思えないのだ。陽気なあの若きヤ

ンキーたちのためにも、これだけは一言触れておきたかった。

僕が進学のため東京で暮しはじめたのは二十五年から。日比谷のGHQ（第一生命ビル）にまだマツカーサーがいた（占領下）時代だが、それから後の彼らを見てもその考え方に变りはなかつた。

※ いまこそ歴史に学びたい

二十世紀はたしかに破壊と殺戮の時代だつた。二次大戦後も幾多の動乱が続き、それは今世紀にはいつても終わる気配はない。「だがいくら何でももう核戦争にまで発展することはないだろう」という気分が、僕自身にもだが、六十九年間も戦争を放棄してきた日本中にも蔓延しているのではないだろうか。いや、確実にそうと信じられるのであればもちろん僕も、こんな下手な文章を長々と書きは

しない。たしかに核が戦争の抑止力として機能している部分はあるだろう。だが、その抑止力が利いているうちにこそ克服しなければ危ない課題が多いのも事実ではないか。そういう気がして仕方がないのだが――。

結論を急ごう。世界はこれから東アジアの時代。とすればアセアン諸国とももちろんだが、まずは日本、中国、韓国が強調して先頭に立たなければならぬのは自明の理。なのに我が国はいまこの両国と最悪の関係。僕はもう何度もちこちに書いてきたが（戦争前夜のニオイ）すら煙りはじめた感がある。互いに過去にまで遡って相手国の非を責めるだけで関係が良くなるわけではない。三国の現状はどっちもどっち、自国の正当性を声高に主張し合うだけという意味では五十歩百歩だ。ここは先ず三国の中の一国が冷静に一步踏み止まり、真の説得力とは何かを学習し直して

外交政策を再構築すべきだろう。とすればその牽引役を果たすべきは当然、さきの大戦で唯一の被爆国となったわが国以外にないはず。集団的自衛権云々に言及するつもりはさらさらないが、防衛に備えるという名目の軍備拡張が、遂には大戦への導火線になったという過去の歴史を思い返せば、これで大丈夫などと政府首脳が得意になっている場合ではないだろう。

前置きが長くなつたが、最近、僕が帰依するお寺の広報誌（最友）に掲載された「武士道」の著者、新渡戸稲造の言葉を引用させて頂いて締めくくりとしたい。

新渡戸稲造は明治から大正にかけて国際連盟事務次長（のち貴族院議員）など務めて各国の外交官からも「ミスター・ニイトベ」と敬愛された国際人だが、その著書の中で「民族優位説の危険」や「歴史の贗造慎むべし」

という持論を展開し、大和民族は優秀であるという妄想を背景にして中国や朝鮮を蔑視することの愚かさを指弾している。それもだが、肝に銘ずべきは彼の晩年の名言だろう。「よきインターナショナルリストはよきナショナルリストでなければならぬし、その逆も当然そうである」。つまり「真の国際人は秀でた憂国者でなければならぬし、真の憂国者は優れた国際人でなければならぬ」ということだろう。寄ると触ると、やれ右だ左だとか、親中派や反中派、あるいは皇国史観だ自虐史観だなどと色分けしたがる空騒ぎもそろそろ卒業して真の、それこそインターナショナルな説得力とは何か―を考えるべき時ではないのだろうか。新渡戸稲造の英語での著書「武士道」は米国大統領ルーズベルトが読んで感動し、若き日のケネディ大統領も愛読したというが、我が国には学ぶべき歴史も、学ぶべ

き先駆者も多いはず、いまこそ先人に学んで、周辺諸国から一步抜け出して先頭に立つて欲しいものだ。

少なくとも僕たちは孫や曾孫の時代に（おじいさんになって死ぬる幸せ）という、ささやかな願いを奪い去るような愚行だけは犯さないで欲しい―。

（エッセイスト）

